三戸の「おしょうろ流し」

赤橋尚太郎

まえがき

神奈川県三浦市初声町三戸の盆行事「おしょうろ流し」を記録する。

古習を残すめずらしい行事であり、昭和三十三年まで存続したが諸種の事情で、昭和三十四年から廃された。筆者が三戸の精霊送りが違っていることを知ったのは昭和三十年頃で、三浦各地の精霊送りに「おしょうろさま」と呼ばれるわら人形のようなものが使われているのを知って、各地の精霊送りを調査していたときに聞きこんだものである。その後、毎年計画はするが交通不便な三戸では早朝の精霊送りに間に合わせることができず、残念ながら実見することができなかった。昭和三十四年八月一日、三戸の精霊送りについて聞き書をするため、同所の長谷川幹男氏を訪ねたとき、その厚意によって、精霊送りの前夜から同氏宅に泊って、早朝の行事を実見し、多くの撮影をすることになった。ところが用意をととのえて十五日夕方同家を訪問すると、今年はやらぬことにきまったとのことで、やむなく帰らねばならなかった。何としても残念なので、せめて充分な聞き書をしたいと思っている中に、長谷川氏が故人になったと聞き、そのままにしてしまった。しかし早くまとめておかぬといけないので、長谷川氏からの聞き書をまとめにかかったが、疑問のところが各所にでたので、誰かに聞きたださねばならぬと昭和三十五年十一月、三戸を訪れ、誰にきいたらよいかと海岸をうろうろしていたとき、たまたま海岸に出ていた長谷川竜雄氏から詳細を聞くことができたものである。

三戸の位置

東京湾の西の出口に突出する三浦半島の先端に三浦市がある。三崎町・南下浦町・初声町が合併したもの。遊覧地として知られた三崎の油壺は、油壺湾と小網代湾との間に突出した小網代半島の先端（三浦道寸の新井城跡）である。この北側に小網代湾をへだててみえるのが初声町三戸の畑で、三戸の部落はその向う側の海岸にある。横須賀駅から三崎行バスで四十分くらい。三崎が間近になったところ、家が一軒もない広い畑の真中に「三戸入口」という停留場がある。下車し右方畑の中に切通された広い道を十五分くらい進むと三戸部落に達する。海岸の砂丘にできた村落で、家は海にそうて細長く群集する。南方から上谷戸（約五十戸）・北

（約四十戸）・神田（約五十戸）の三部落からなり、主として漁業及び農業を営む。寺四（浄土宗―光照寺・福泉寺・霊川寺。浄土真宗―光徳寺）。神社一（諏訪神社）。

盆のやり方

三戸の盆は新暦八月十三日から十六日まで行なわれる。新盆の家では八月に入るとすぐ庭先に青竹を十字にし、十字の左右端と上端とを縄でへ字形に結んだもの（名称なし）を立て、これに白張の提灯をさげ、毎夜あかりをともす。これは二十四日まで続けられる。一般の家は十三日朝、仏壇に「おしょうろさま」及び「おもりもの」をかざる。「おしょうろさま」と呼ばれるものはむぎわらを長さ二〇cm、直径四・五cmくらいに束ねたものに新聞紙を巻いたものを心とし、前面にだけ色紙をはり、更に帯をしめた形に中央に別色の紙をはりつけ、帯の上下に大きい花形に切った色紙（別色紙で三枚くらいはり重ね八重の花状にする）をはりつける。細く切った赤色紙を斜にまきつけた長さ二一cmのオガラ二本を、前記わらたばの左右にはりつけ（一端はわらたばの端にそろえる）、外側にのこぎり状に切った色紙をはりつける。オガラの上方先端に赤色紙をまきつけ、先にはさみを入れて花形に開く。この花形（けずりかけを意味するか？）とわらたばとの間に上を山形に切った幅広の別の色紙を横にはりつけたものである。何の形ともわからぬがもとは人形であったのではないかと思われる感じである。盆の前日くらいになると部落内の店（何でも売っている店）で売り出す。各家「おしょうろさま」一対を買いもとめる。仏壇の本尊さまの左右にならべて立てる。仏壇にはこのほかおがらを折って足にした「なすの馬」と「きうりの牛」各一と「おもりもの」がそなえられる。おもりものはマコモ（芦の茎を切ったものを二所あんで作る一種のむしろ）の上にのせられる。それは「なす」（さいのめに切ったもの）、「おくりだんご」（小麦粉をこねて、ちぎったものにきなこをまぶしたもの）をそれぞれ里芋の葉の上にのせたもので、盆花（みぞはぎのこと）を添える。仏壇の前には縄を張り、根こぎにした畑のもの（その時、畑に作られているもの、いね・おかぼ・さといも・えだまめなどが普通、あずき、さつまいも、あわなどをあげる家もある）をぶらさげる。仏壇の前方縁側近く座敷に盆提灯をさげる。それから寺へゆき、墓前に二本の青竹を立て、これに縄をはり、畑のものをかける。又マコモにのせたおもりものをそなえる。他に花やさかきをあげる家もある。真宗の家では仏壇にはやるが墓地にはあまりやらないという。「おしょうさま」の形は三浦各所におこなわれるものが皆同じである。それらは毎年きまった数軒の家で作られ、店におろされる。それが何をかたどったものか今では全くわからないし、誰もそれが何を意味するかを意識していないが、ただ習慣として一対を買い求めて仏壇にかざる。恐らく精霊のよりしろであろう。迎

え火はたかない。夕方になると盆提灯と線香をもって墓まいりにゆき、寺の本堂に上る。和尚が本尊前で読経を終えると、墓地へ行き墓前で読経をする（十三・十四・十五日毎晩くりかえす）。新盆の家の提灯は白張りであり、寺にまいるとき米をぬいこめた三角の袋とぞうりを本堂にあげる。新盆の家では十四日又は十五日に夕方寺へまいる前に、土地の同じ壇下一同が集まって念仏を称えることになっている。

おしょうろ流し

十六日朝飯がすむと仏壇や墓地のおもりものなどが取りかたずけられる。おしょうろさまやおもりものはマコモに包んで浜小屋へはこばれる。浜には各部落毎（上谷戸・北・神田）に浜小屋と呼ばれる小屋が盆がはじまるとすぐ子供らによってたてられる。子供らは部落内の各家からムイカラ（麦わら）をもらって来て、小屋の前に積み上げ、毎晩その小屋で寝とまりする。ムイカラは各家で二把くらい（一把の家も三把の家もある。ない家ではおかねで十円か二十円をくれる）くれる。これは「おしょうろを流す」ときの重要材料である。小屋で寝とまりするのはムイカラの番をするためである。浜小屋に寝とまりする子供は小学生以上げんぷく(註1)前の者である。十六日朝は四時か五時ころにはもう各家からおもりものを持って浜小屋へ来る。子供らの家からは一人づつ大人が出て、「おしょうろを流す」（この行事をこのように呼ぶ）舟を作るのである。この舟は「ふね」とよばれる。長さ一・五cmくらい（五尺くらいという）の青竹(註2)を五〇cmおきくらい（二尺おきくらいという）に長さ四mくらいならべた上にそれと直角方向にムイカラをほぐして厚さ一・五mくらい（二尺五寸から三尺くらいという）に積み上げた上に、又同じように青竹をならべ、縄でしばり、ムイカラのいかだを作る。先の方は竹を心にし、ムイカラをよせ付け、縄でからげて舟のへさき形にする。かくて長さ五mくらい（二間半くらいという）のムイカラの「ふね」が作られる。七時頃には出来上る。ふねができると各家からはこばれた「おしょうろさま」は一mくらいの竹に縦に芋ざしに何個も貫かれ、舟に立てられる。おしょうろさまのあるかぎり何本も何本も作られ、立てられる。おもりものはマコモに包んだまま、ふねに積まれる。墓地からはこばれたおもりものも積まれる(註3)。。寺から持って来たセガキの旗（八月七日セガキのとき色とりどりの紙で作られる）数本も立てられる。新盆の墓地にあげられた白張提灯も竹に張りわたされた縄にさげられる。ふねができ上り、おもりものが積みこまれると子供らはオミキをふねにそそぎかけ、皆で少しづつ飲む。手伝った大人たちにも飲ませる。用意ができると大人たちが皆でもち上げて海に入れる(註4)。子供らは裸になっておよいでこのふねを沖へひき出すのである。ふねから何本も縄を出し、その先に板子をしばりつける。子供らはその板をおして泳ぐのである。ふねは沖へ沖へとひいてゆかれる(註5)。浜の人達は皆これを見送る。ふねのあとから漁舟が

一～二そうついてゆく。つかれた子供を収容したり、交替の子供をのせてゆくのである。二〇〇mくらい沖にすずめ島と呼ばれる岩がある。その少し沖までひいてゆくと板子をはずし、子供らは漁舟に収容される。「ふね」は流されるのである(註6)。沖に出るにつれて「ふね」が沈み、子供らに骨がおれるようなときには青年が手伝ってやったり、漁舟がひいてやったりするという。「ふね」の行先については「鎌倉へゆきつけば本望」といわれている。浄土宗本山光明寺が鎌倉にあるからであろうか。「ふね」はどこかへ流れ去るのであるが風むきによっては近くの浜に流れつくこともある(註7)が、そのままにしてしまうという。流れついたときにはひっくりかえり、「おしょうろさま」もおもりもの多くはなくなっているという。浜へ帰りついた子供らは宿元に集り、ごもくめしや西瓜のごちそうになって解散するのである。

あとがき

三浦市でも盆終了とともに「おしょうろさま」はおもりものといっしょに海岸の一定の場所におくられるところ（松輪）や、畑中のわかれ路におくられるところ（毘沙門）や、海岸のごみすて場におくられるところ（金田・上宮田）や、海岸の小川の縁におくられるところ（金田）など、送る場所は変っても部落ごとに幾個所かに集めるというやり方は同じであり、各家毎にそのところに持って来ておくるのである。それは「おしょうろさま」を中心に飾り、なす馬やきうり牛、おもりものを前にそなえ、竹を二本たて縄を張り、根こぎにした畑のものをぶらさげる。仏壇でおこなわれたそのままの形をおくるときにも形つくるのが普通である。ところが初声町の中でも三戸だけが部落単位に大きいムイカラのふねを作り、部落中の「おしょうろさま」をおもりものをそえて沖へ流すという形をとっているのである。これは盆行事として古風を伝えるものであり、本県下唯一のものであった。山口県でも日本海岸の蓋井島という小島に本例とよく似た精霊送りが残っており、やはり麦わらの大舟で部落中の精霊を海へ送るのである(註8)。

祖先の霊を送る民俗行事として是非とも残しておきたい古い習慣であった三戸の精霊送りがやめられた理由は二つある。

一、材料の麦わらが集めにくくなったこと――部落の人達が麦作をあまりやらなくなったことが最大の原因であるという。麦を作るより、大根や白菜やきゃべつを作った方が反当収入が多いからである。麦作りをやる人も、麦わらを西瓜畑に敷いてしまうから「おしょうろ流し」に出すのがなくなったという。

二、教育上面白くないと学校から中止方の申し出があったこと――浜小屋に夜とまることが子供らには大きい楽しみであったが、各家からもら

い集めた金で買食いしたり、酒をのんだり、たばこをすったりする者もあったからであるという。

右のような理由で近年は中止の声が次第に強くなっていたが、昔からの習慣だからとて続けていたのである。しかし昭和三十三年にはむぎわらもあまり集まらず、小さい舟を作って流したという。昭和三十四年にはやる、やらぬでなかなか決しなかったが、盆の数日前遂に中止と決したという。それでこの年から「ふね」を作ることをやめ、漁船に「おしょうろさま」やおもりものを積みこんで沖に漕ぎ出し、流すことにしたという。むぎわらぶねを作る風習はなくなったが部落中の「おしょうろさま」をいっしょに舟で沖へ流しにゆくという形は残っているのである。『「おしょうろさま」にあげたものをふんずけたらもったいないからね』と長谷川竜雄氏が話した言葉は村人がひとしくいだいている祖先からうけついだ尊い心であり、これが古い習慣を今日まで伝えしめたものであろう。三戸は極めて交通が不便で、近年まであまりよその者が来なかったということが、古い民俗をよく残したものと思う。今の中に聞きだせばいろいろ求め出すことができるに違いない。筆者が「おしょうろ流し」を聞き出しにいって、「げんぶく」という民俗が残されていることを聞き出す副産物があったのでもわかろう。

（註）

（1）十二才になると「げんぶく」と称する行事があって若衆仲間に入るのだが、これは八年に一度おこなわれるので、その年によって年長者の年が違うのである。「せいとっこ」の「おやかた」が大将株になるのだというがそれには特に呼び名はない。（げんぶくについては別に稿を起こす）。

（2）せいとっこの宿元が世話をやき、子供らを差図して必要な資材（竹・縄など）を部落内の家からもらってこさせる。

（3）もとは子供らが墓地から一せいに運んだものだというが、あつかいがぞんざいであり、取り残しもあるので最近は各家で取り片づけるという。

（4）上谷戸ではこの直後、僧の読経をするという。北・神田ではやらない。

（5）伊豆の天城山の方向に向ってゆくという。方角は西方である。

（6）最後に舟の頭をむける方向については意識されていない。

（7）「西の崎」や「神田の浜」についたこともあったという。流れついたことに対して特に縁起をかつぐというようなことはないそうである。隣の小網代湾へ流れこんだこともあったが、小網代部落では人をやとって沖へひいてゆき流したといわれている。

（8）松沢寿一・国分直一・中村省吾・植松一郎「蓋井島村落の歴史的・社会的構造」（農林省水産講習所研究報告人文科学篇第三号、昭和三十二年十一月）中に国分直一氏が「葬送習俗・墓制」の中にこのことを記している。